

セッション：来たるべき経済社会の構想—20 世紀前半アメリカの経験から
Visions of “Things to Come”: The early 20th century American experience

趣意書

第二次世界大戦以前の経済思想がアメリカを含めて多様なものであったことは、現在では常識となっている（Morgan and Rutherford 1998）。しかし、その多様性は経済理論の次元にとどまらず、来るべき経済社会へのさまざまな構想にも見られた。

このセッションは、加藤健（東京都立大学・院）と若田部昌澄（早稲田大学）の二つの報告から構成される。その特徴は、20 世紀前半のアメリカを主たる舞台として、社会保障（社会保険）と、通貨・金融・国際通貨制度を中心とするマクロ経済構想の二つの側面から、経済思想と政策・制度の関連を探ることにある。この二つの領域は、福祉国家とマクロ経済政策という、第二次世界大戦後の合意事項において中心的な役割を果たしていくと考えており、この過程を探求することは現代の経済社会の成り立ちを考える上でも有益であると考えます。なお、報告の対象はアメリカを主たる対象としているものの、アメリカの経済思想は世界から影響を受け、また世界に影響を与えた。この点については、報告においても十分に留意したい。

参考文献

Morgan, Mary, and Malcolm Rutherford (eds.) (1998), *From Interwar Pluralism to Postwar Neoclassicism*, Duke: Duke University Press.